

リサーチ



二の宮小学校職員室だより

H.13.2.6 No.18

テレビを見て思いました

何曜日の何チャンネルで放送しているのか、にわかには思い出せませんが、どこかの放送局で『伊藤家の食卓』という番組を放送しています。ご存知の先生も多いかと思いますが、その中では各地の視聴者が自分で発見したあるいは編み出した「裏ワザ」をビデオで多数紹介しています。

その多くは、家庭の主婦や小中学生といった「ふつうの人たち」が見つけ出した「裏ワザ」や「秘訣」ですが、普段の生活で感じている『困ったこと』や『不便なこと』の解消をめざして『こうなればいいのに』『こうできたら楽で便利』と思える「自分の手と頭」を駆使して編み出したワザを不特定多数の視聴者に向けて公開しています。

曰く『甘栗の皮を、手を汚さずにあっという間にむける裏ワザ』、『古新聞の束をきつく縛る裏ワザ！』、『家庭で簡単に温泉タマゴを作る裏ワザ！』、『クレヨンなどの頑固な汚れを落とす裏ワザ！』等々、手づくりのまさに生活から生み出された知恵の宝庫です。

きっと様々に試行錯誤したのでしょうか、『こんなことができたらいいのに』という想いから素材や方法を試してたどりついたという自慢が窺えるような『見て見て！』という声が聞こえてきそうなものばかりで、工夫を存分に楽しんでいる様子も窺えます。

そのほとんどは特別な道具を使わなくてもできるものばかりで、『クレヨンなどの頑固な汚れを落とす裏ワザ』などは、何とグレープフルーツの皮の黄色い部分でこするだけ、という簡単なもの。

どうしてグレープフルーツの皮にたどり着いたのかは不明ですが、おそらくここにたどり着くには多くのものを試したのではないのでしょうか。あるいはひょいと思いついて試してみたら思いがけずうまくいってしまったのかも知れませんが、こうした活動は学校で行われる総合的な学習へのアプローチに通じるものがあるだろうと常々思いながらテレビを眺めています。

そして、この番組で感心させられるのは、一般視聴者から寄せられたそうした裏ワザの紹介後、その分野の専門家が登場して、なぜそうできるのかについての「科学的な説明」をし種明かしをしてくれることです。

裏ワザを生み出した本人も、そうした裏ワザを編み出すからには、『こうすればうまくいくのではないか』というある種の予見をもって試行錯誤しているはずですが、こうした

科学的・文化的な「正統な説明」がなされることで、より確かな知恵として定着させたり『それならば、こんな方法も試せるはずだ』という具合に発展させたりするというように「生きた知恵」としていくことも想像に難くないからです。

『なるほど。この果物にはこんな成分が含まれていて、その成分の持っているこれこれの性質がうまい結果をもたらしたのか。ところで、その性質をうまく働かせれば、の問題を解決することにも使えそうだな。試してみようか。』といった具合です。

このことは、私に総合的な学習と教科の学習の関係を連想させます。

試行錯誤し様々に工夫を施して自分なりの知識や技を生み出す過程が、総合的な学習の典型的な姿だとすると、科学的・文化的な「正統な学び」でそれを裏付けられる体系的な知を学び取るのが教科における学習の一典型と考えられるのです。

もちろん体験を通して得られた知識や技を裏付けることだけが教科における学習ではありませんが、総合的な学習と教科の学習との関係をそのように図式化してとらえてみると、総合的な学習は決して教科の学習の発展的な活動でもなければ、教科の学習の下位に位置づけられるものでもないということがよくわかりいただけと思うのです。

実体験を通し、自分の五感をフルに働かせて「頭と心と身体」で学び取る総合的な学習で得られるのは、子どもなりの言葉で語られるプリミティブな知識や未分化な知識、個々ばらばらな断片的な知識かも知れませんが、それを整理統合して自分のそれまでの知識の枠組みをつくり変えたり科学的・文化的な手法や言葉や概念、知識で裏付けたりするのが各教科での学習なのです。

さらに教科で得た知識や手法を自らの体験活動・探索活動に生かしていくという総合的な学習と教科での学習のサイクルが、「生きて働く知識」としての知恵や知性の育ちにつながるであろうというのがこれからの学習指導に必要な視点です。

ところで、人間の脳細胞は誕生から1歳までの間が最も多く、後は減少する一方なのでそうです。でも人間は、幼児から大人へと知的にも身体的にも成長していきます。それは、幼児の持つ細胞はその数は多いけれども細胞同士が個々ばらばらでつながっていないのに対し、体験を重ねたり知識を取り入れたりするうちに細胞同士が手をつなぎ、関係をつくっていくことで密度と質を高めていくからだと考えられています。

関係づけ、体系づけをすることが「知」としての定着につながり、成長につながるということは、「学習」を考える上で^{すこぶ}重要なことでしょう。

学ぶという行為は、自分と学習対象との間に関係や意味を見出す作業ですし、一方では一見無関係に見えるモノゴトとモノゴトの間に関係を見出し、位置づけ、体系として自分の中に取り込み自分自身をつくり変えていく作業だからです。

つまり、書物から得ようがインターネットから得ようが、知識と呼ばれるものが「関係づけられる」ことがなくばらばらに存在している限り、それは腑に落ちて理解するということを意味する「わかる＝真の知識」にはなり得ないのです。

そう考えてみると、総合的な学習でも教科の学習でも自分にとってゆるがせに出来ない取り組みを通して手と足と頭と心で「関係づけ」をすることができるように、したくなるように支援し見守ることが、私たちに求められているのかも知れません。